

地方小出版

情報誌

アクセス

毎月1回	1日発行
購読料	定価 150円 (本体 136円)
	年間 1,500円 (税込み)
振替	00120-0-19017

発行所 (株)地方・小出版流通センター
編集 アクセス編集委員会

〒162-0836 東京都新宿区南町 20
TEL.03-3260-0355 FAX.03-3235-6182

季刊ローカル誌NAGIを100号で終刊 先輩誌「谷根千」の編集後記集を単行本に

文／吉川和之 (月兎舎代表)



1999年6月に自費出版した『くまのみち』、NAGI創刊号(2000年6月)と発売中の96号。

あと1年。医者に余命宣告されたわけではなくて、当舎が三重で季刊発行するローカル誌NAGIの終刊を1年後と決めたのです。2000年夏の創刊から四半世紀でぴったり100号。自ら生み育てた雑誌へ引導を渡すのに、これ以上のタイミングがあるでしょうか。

今春発行の96号に終刊告知を載せると、少なからず周囲がザワついたようで、新聞が2社取材に来て、ある自然食品店は「残り4号に広告を出す」と言ってくれました。「バックナンバーフェアをやりたい」と電話をくれた書店や、「煩惱の数(108号)までやったら」「引退宣言してから復帰の例もある」なんて読者メールも。惜しまれるうちにやる決心をしてよかったです。

時代に背中を押されて

媒体を持つなんて大それた夢を抱いていたわけではありません。印刷会社のコピーライターを経てローカル出

版社員となった私は、伊勢志摩の旅をテーマにした隔月刊誌の営業や編集に7年半携わった後、30代半ばで自主リストラを宣言、フリーランスの編集者となりました。

せつかくフリーになったのだから自らの表現を世に聞きたいと思った私は、同じくフリーの森武史カメラマンと、伊勢から和歌山県田辺まで熊野古道二百数十kmを歩き、その成果をA4モノクロ写真集『くまのみち』として共著で自費出版しました。古道の一部が、「紀伊山地の霊場と参詣道」としてユネスコ世界文化遺産に登録される5年前のこと。当時はまだ類書が少なく、世界遺産登録への機運もあって2,500部を完売しました。

100万円超の利益を手にした私は考えました。このまま売り上げに埋もれさせていいのか、それとも趣味のバイクに注ぎ込むか。出した答えは「新たな媒体をつくる」でした。

熊野古道は、伊勢と熊野三山、高野

山、吉野を結ぶ旧街道。昔ながらの山道があれば、国道など舗装路となった区間もあります。舗装路から石畳の峠道へ、峠から舗装路の町へ。これを繰り返していると、路傍に自動販売機のある近代文明をありがたいと思う反面、自動車に轢かれる心配のない自然道が恋しくなったり。便利さを求めるあまりに無くしてしまった大切なものが何となく見えてきます。

時は世紀末。大量生産、大量消費、大量廃棄の価値観を反省するように「スロー」というキーワードが聞かれるようになっていました。よしっ、人を切り口に、有機的で普遍的で持続的な情報を届ける雑誌を創刊しよう。『くまのみち』販売のためにでっ上げた「月兎舎」の屋号も、書店との関係も引き継げるし。格好よく言えば、「時代に背中を押された」わけです。

こうして2000年6月1日、NAGIは初声を上げました。創刊号の特集は「沢村栄治と西村幸生」。ともに伊勢出身で、プロ野球草創期に巨人と阪神のエースとして活躍したものの、太平洋戦争で没した大投手を思い起こすことで、反戦を伝えたかったのです。

惹句は、「そろそろ人生に波風立てませんか」。凧とは風のない穏やかな海の状態ですが、それを逆説に用い、担当する連載コラムのペンネームは波風立流に。今にして思えば、自らを鼓舞するメッセージだったのかもかもしれません。

地方小さんとは、札幌の同業、館浦あざらし氏の勧めで47号「松浦武四郎の歩き方」から取り扱っていただくようになったので、お付き合いは13年目に入りました。

25年100号を潮時に

発行人の私と、編集人の坂美幸(前職の後輩)でスタートしたNAGIは、3人目の舎員を募集し育てようと努力した

ものの叶わず、7代目の舎員が退舎したときに、もう新人を採るのはやめようと合意しました。20周年（80号）の直後です。

さて二人であと何年やれるか。坂は3年と言いましたが、私が5年を無理押ししました。自身の年齢（終刊時63歳）もあります、キリのいい号数で終えたかったから。

長年続いた雑誌の多くは、号を重ねるごとにページ数が増えたり判が大きくなったりと成長し、反対に薄くなったり価格が高くなったり、発行間隔が空くようになると廃刊していきましたが、私はNAGIをそうしたくありませんでした。創刊号から最終号まで、同じ厚み（100頁前後）と装丁、価格と発行サイクルで、しれっと終わりたい。ちなみに価格改定は4度行っているものの、2回は値下げと復旧で、あとの2回は消費税アップ分を転嫁しただけ。

言うまでもなくネット社会を迎えて以降、出版を取り巻く環境は年々厳しさを増しています。三重県下の書店数は創刊時の半分ほどに減ったし、広告収入はピーク時の6割ほど。収入は減り続けるのにガソリン代や送料は値上がりし、インボイスなる制度が始まり事務作業は煩雑化……。これだけ逆風の材料が揃えば、終刊もやむ無しと思われるでしょうが、やめる理由はそこではありません。「潮時」と感じたから。後継ぎのいない個人商店が暖簾を仕舞うのと同じです。ただし定期発行のNAGIは終わっても、月兎舎はまだしばらく続けます。

「谷根千」を知っていますか

ただいまNAGI-97号（6月1日発行）と同時発刊予定で、単行本『谷根千（やねせん）の編集後記』を編集制作しています。

「谷中根津千駄木」をご存知でしょうか。東京の下町で1984.9～2009.8に発行されていた季刊誌で、作家としても知られる森まゆみさんと、山崎範子さん、仰木ひろみさんの3人が、それぞれ乳飲み子を育てながら四半世紀にわたって地域の歴史や文化を掘り起こし、NTTタウン誌大賞に2度も輝いた伝説の地域雑誌です。

なぜ三重の出版舎が、15年も前に



地域雑誌「谷中根津千駄木」全94号。1984年9月～2009年8月。

終刊した東京の地域誌を、と思われるでしょうね。

長男の嫁（販売担当）が第2子を出産した直後、子連れで出舎しております。オギャーと泣く孫の声を聞いていたら、ふと子供を産み育てながら編集する谷根千を思い起こしたのです。まだやってるのかなと懐かしく思ってネットで調べると、もう10年以上前に終刊されてましたが、在庫バックナンバーの販売はしているとのこと。

さっそく数冊注文したら、なんと対応いただいた山崎範子さんがNAGIを定期購読してくれたのです。彼女は森まゆみさんとともに、大正大学が発行する「地域人」の編集をされており、同誌でNAGIや小舎刊の単行本を紹介してくれました。そんなことをNAGIの編集後記に書いたら、松阪の読者から「谷根千を全号持っているので、欲しかったら差し上げますよ」とのメールをいただき、月兎舎まで届けてくれたのです。

ローカル誌黄金時代の記念碑として

いただいた谷根千全巻（94冊）を、とりあえず編集後記だけ通して読むと、これがとっても面白い。それぞれ3人・3人・4人の子を出産・育てながら地域雑誌の取材・編集・営業に奔走する女性たちの姿がありありと浮かんできます。小説や回想録と違った、編集後記ならではのリアルに満ちて。



『谷根千の編集後記』四六判256頁、1600円＋税
ISBN978-4-907208-26-4 C0095 ¥1600E
2024/6/1発売予定

少子化や働き方改革と言われる現在からは考えられないバイタリティと、地域と編集者の濃密な関係が伝わってきて、こんな時代があったんだなと感じると同時に、ローカル誌黄金時代の記念碑として多くの人に読んでもらいたいと思いました。

その後、「地域人」最終号となった映画館特集で、私が岐阜と伊勢の映画館の取材を担当させてもらおうと、仕事に区切りをつけた山崎さんは松阪へ移住（2年間）されることに。

月兎舎に山崎さんを招いたとき、谷

根千の編集後記を1冊にまとめてはと提案したら、「じゃあ吉川さんが出してよ」。いろんな出版社と関わりのある森まゆみさんから、どこかの社に働きかけたら実現の可能性が高いのではと思って言ったのですが、「エリアの違う同業から出るのも面白いんじゃない」と。

NAGIが終刊するにあたって、自らの来し方より、よりストイックでアカデミックな先輩誌の四半世紀を振り返るほうが、意義あることかとも思い腹を括りました。94号分の編集後記に加え、3人に「終刊から15年後の編集後記」を書いてもらい、四六判並製256ページで、6月1日にNAGI-97号と同時発刊します。

「谷根千」は15年以上前に東京で発刊されていた雑誌ですから、NAGIの販売エリアである三重県民には馴染みがありません。直販ルートでは、ほとんど売れないでしょう。地方小さんが頼り（岡安さんよろしく）。谷根千や森まゆみさんのファンに買っていただけたらと期待して、発刊直後の6月29日に東京千駄木でトークイベントを予定しています。

出版告知を兼ねて山崎さんにインタビューしてきましたので、内容を抄録します。

ママ友が始めた伝説の地域誌

吉川 「谷中根津千駄木」は、保育園のママ友から生まれたんですよ。

山崎 私と森さんの子が同じ保育園に通って、仰木さん（森さんの妹）とはマンションが同じだった。3人とも媒体を作りたい気持ちだったから一緒にやろうと。

吉川 どうして谷中・根津・千駄木で括られたんですか。

山崎 最初は本郷にしようと思ったの。東大はあるし、出版社や古書店も多い。漱石や鷗外も住んだ文化の宝庫だから。でもエリアが広すぎるし、本郷が付く雑誌はすでにあったから。当時はみんな千駄木に住んでたので、谷中と根津をくっつけて「谷根千」に。

吉川 3人の役割分担は。

山崎 最初は3人で取材に行っ、森さんが書いて、みんなで版下貼ってた。そのうち、作家活動や大学の講師



「谷中根津千駄木」元発行人の山崎範子さんと対談するNAGI発行人の吉川。

で忙しい森さんは書くことに専念するように。私が進行や配達、仰木さんが総務や経理を担うようになりました。校正は3人でやって、版下貼るのは私と仰木さん。

吉川 制作はずっと版下・写植だったようですが、NAGIは創刊からDTPで、版下だったら出そうと思わなかったです。続けていけるかと確信されたのはいつ頃ですか。

山崎 2年目かな。5号が第1回NTTタウン誌大賞になって、マスコミが取り上げてくれたら一気に認知度が上がり、取材や営業がやりやすくなって、定期購読者も一気に増えました。大賞をもう1回と、サントリー地域文化賞、山本有三記念郷土文化賞もいただい。賞金が入ると溜まってた印刷所

への支払いに充ててました（笑）。

吉川 すごいですね。NAGIは賞なんかもなかったことがない。終刊を考え始めたのは。

山崎 20周年頃かな。私と仰木さんが連れ合いを亡くして、部数も7000を割るようになり、そろそろかなと。定期購読を中途半端にできないので、2年前に告知をして2009年の94号で終刊。本当は93号で終わるはずだったんだけど、どうしても載せておきたい原稿があるからと、森さんが印刷費を自腹で持って、もう1号。

それにしてもNAGIは、私たちがやめようと思いついた頃に創刊して、よく四半世紀も続いたわね。

*

（よしかわ かずゆき／月兎舎代表）

新刊ダイジェスト

表示されている値段は本体価格となっております。ご購入には別途、消費税がかかります。

『大逆事件と連合赤軍 極北の革命兵士』 ●松井浩章 著



大逆事件は、1911（明治44）年1月、明治天皇暗殺計画を理由に、全国で反体制者と目される多くの人々が検挙され、24名が死刑宣告を受けた近代日本における最大の冤罪事件である。うち12名は無期懲役に減刑されたものの、幸徳秋水ら12名は判決から1週間で処刑された。

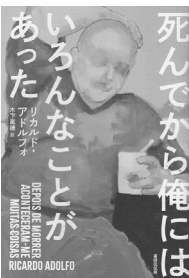
死刑宣告者の中に4人の熊本県人がいた。処刑された松尾卯一太ら2人と、無期懲役の2人である。松尾は現玉名市で生まれ、東京専門学校（現早稲田大学）に学んで帰郷し、養鶏業に就く一方、社会主義運動に熱中し、『熊本評論』などを発行して他の3人と親しくなっていた。松尾と同郷であったことから、その生涯と思想形成を追っていた著者は、思わぬ事実と遭遇し、奇しき因縁に息を飲むことになる。それは、松尾の子孫（従兄弟）に連合赤軍事件の当事者がおり、

健在であることを知ったからである。当事者に面会し、「当事者の責任として、連合赤軍の正確で多面的な記録を残すことが使命」と聞かされ、松尾の謀反の血が脈々と流れているを感じている。同時進行で連合赤軍の遺族、関係者を訪ね、深層を掘り下げて大逆事件と重ね合わせていく。大逆事件の大量処刑に人々はおののいて労働・社会運動は沈黙した。

連合赤軍のリンチ大量殺人のおぞましさを、若者は政治や社会問題に距離を置いた。それが今の生きづらさや閉塞感につながっているのではないか、負の歴史にこそ学ぶことは多い、耳目を塞いではならないとのメッセージが発信される。（飯澤文夫）

◆2000円・四六判・304頁・熊本日日新聞社・熊本・202402刊・ISBN9784911007068

『死んでから俺にはいろんなことがあった』 ●リカルド・アドルフォ 著 / 木下真穂 訳



奇妙なタイトルに首をひねってしまうが、この小説の中では「死んでから」というのは実際の「死」ではなく社会的な「死」を意味している。

妻カルラと幼い息子の三人家族の俺。物語はカルラが怪しげなバラックのおやじからバカでかいスーツケースを売りつけられるところから始まる。その買い物から帰宅しようとする、なんと地下鉄が止まってしまい、右も左もわからない場所で降ろされてしまう。なんとか家に帰ろうとするが、言葉もわからず、すべてが裏目に出してしまう。

実は郵便配達をしていた俺は何らかの罪を犯し、故郷のくから逃げてきて、島に不法滞在をしている。妻は何とか仕事を見つけたが、俺は仕事の声がかかるのを期待して、息子の世話をしな

がら携帯メールを確認するだけの日々。俺は本当は死んでるんじゃないかと思ったこともある。しかし、次々にいろんなことがありすぎた。一向に家にはたどり着かず、妻とも険悪になり、ついには不本意ながら警察を頼ろうとするが……。

著者は1974年に当時ポルトガルの植民地だったアンゴラに生まれたが、アンゴラの独立によりポルトガルに移った。2012年より東京に在住。ポルトガルは移民の国だが、移民たちの苦労話を正面から描く作家がいなかったことが不満だった著者。そうした思いが不条理でユーモラスな小説を誕生させた。喜劇仕立ての中に貧困、移民、人種差別などの問題点が含まれる傑作である。（Y）

◆2100円・四六判・253頁・書肆侃侃房・福岡・202402刊・ISBN9784863856035

『満腹の惑星—誰が飯にありつけるのか』 ●木村聡 著



食事という営みは人間の生活には欠かせないもので、そこから社会の姿が見えてきたりもします。本書は著者が世界各地の食事の風景を巡って垣間見た世界の姿の記録です。といってもグルメな世界というよりも、もっぱら庶民の食べ物を中心です。

内戦が終わったばかりのリベリア、政治に翻弄されるエジプトの「ゴミの町」、中東・西アジアからの移民が滞留するセルビア・ハンガリー国境、バングラデシュにあるミャンマーを追われたロヒンギヤの人たちの難民キャンプなど訪れた場所は多岐にわたります。ある時はベトナムの旅芸人の一座と行を共にし、訪れた先でカエルやネズミをふるまわれたりもしますが、これが意外に美味だそう。またある時はロヒンギヤ難民がキャンプで手に入れた食料を工夫して、

郷土の味を作ろうとしているのを目の当たりにします。

ちなみにこちらの郷土の味（魚の発酵食品）は著者にとっても少し刺激が強すぎたようですが…。エジプトの「ゴミの町」では、集まった生ゴミで豚を育て、その豚を人が食べるという循環が出来上がっていました。キリスト教系のコプト教徒が従事しているのも豚も食べられません。困難な状況に置かれようと（もちろんそうでなくても）、人間が食べ物にありつくために力を注ぎ込むのは同じですし、少しでもうまいものを食べたいと思う心も同じです。今日も世界中に満ち溢れる社会と「メシ」を巡るエネルギーを感じられるドキュメンタリーです。（副隊長）

◆2100円・A5判・270頁・弦書房・福岡・202403刊・ISBN9784863292826

『家族のあとさき』 ●大野咲子 著

家族の
あとさき
大野咲子
◆◆◆◆

この写真家にとって本作が初の写真集となる。リビングのカーペットの上で眠る愛らしい二匹の猫や道端の小花、洗い残しの食器が溢れたシンク等、一枚一枚、日常的でありまた静かでありながら、深く写真家の心情が沁み渡っているのを感じることができる。この感じは当初漠然としたものだ。しかし、あとがきに記されたテキストの情報を読むことによってそれが突如として意味の形となって浮かび上がってくるのである。そして、日常的で静かであった一枚一枚が一つの文脈のもとに見るものに迫ってくるようになる。

写真家は2020年2月までおよそ3年4ヶ月の間不妊治療に取り組んだ。今では保険適用の対象となる不妊治療だが、当時はそうではなかった。「少なくとも2,744,006円は使いました。高い方ではないと思いますが、少しもったいなかったなと思います」と写真家は記す。一連の言葉の中でも印象深いのは「この作品は、治療の影響で視覚感覚が変わったことをきっかけに撮影を始めました。日常で見る些細なものが生殖に関わるものや

血のように思えてくるほど不妊治療に取り憑かれていました。」という一節だ。改めて写真家の視点と自分の視点を重ね合わせるようにして一枚一枚に見入ってみる。テーブルに置かれた内服薬袋や診療中と思われる写真家自身、そして散乱する医療費領収書の束などは言うに及ばず、食パンに塗られた赤いジャム、濁った池に捨てられた子熊のぬいぐるみ、曇った鏡の水滴が形作る異様な紋様等々がなんと鮮明に鑑賞者の無意識に迫ってくることだろうか。選び取られた写真は、母親が写真家のために作ってくれた幼少期のアルバムを参考にした、と言う。「私の個人的な視点・経験ではありませんが、他者となんとか繋がれないかと写真を選び直し続けました。…この光景は、母にあって私にないもの、私にあって母にないもの、共にあるもの、そして誰かの過去であり、未来かもしれない」と写真家は最後に書いている。(U)

◆ 4000円・236mm × 263mm 判・40頁・PURPLE・京都・202403刊・ISBN9784991290725

『北近江の巨樹を見に行く―自然と歴史と祈りのものがたり』 ●西岳人 著



「どっしりと大地を踏みしめる幹は、象の巨体のようにゆるく波打ち、その頭ほどもある瘤が塊となって樹皮から盛り上がっている。うねるように突き出した枝は、獣の腕のように絡みながら四方八方へ伸びている」(柏原のケヤキー長浜市高月町柏原)。このような巨樹の威容に圧倒された時、人は畏怖の念に打たれずにはいない。その畏怖の念から古来、日本人は巨岩とともに巨樹に神が宿ると感じ、信仰の対象としてきた。今でも日本人の無意識にはこのような樹木信仰、磐座信仰がその基層に息づいているのではないだろうか。それが巨樹巡り、巨岩巡りの旅へと人を誘うのである。本書は、そのような旅に誘われたひとりである著者による北近江の巨樹巡り紀行である。訪ね歩いた巨樹が場所の略図やその威容の写真とともに紹介され、巨樹が神樹となり霊樹となって聖別されるための伝説が紀行文に盛り込まれる。ここではまず先に挙げたような巨樹の描写を愉しみたい。「木は曲がりくねった幾本もの枝が絡み合い、新緑の毛糸を撚り合わせたような葉を茂らせている。

葉の茂る様を見ていると樹齢700年の老樹とは思えない躍動感を感じさせるが、太い幹は樹皮が剥がれて灰褐色に朽ち、苔が張りついている。幹が縦に裂け、裂け目から背後の光がもれている」(清滝のイブキー米原市清滝)。巨樹に関心のある者なら実際に見ずともこのような描写がなされる必然性のようなものを感じることができると思う。

また巨樹に纏わる伝説や歴史物語を知るのもこのような巨樹巡り紀行の愉しみである。そこには必ずやその地域の固有性が刻印されている。長浜市高月町には、早魃の夏に雨を恵んでくれた竜神への感謝の証しに、ムクノキの下で命を絶った義人の話が伝わる(高月野神塚のムクノキー長浜市高月町高月)。米原市の西山八幡神社の杉並木には、当神社に秀吉が安産祈願をしたところ秀頼が無事生まれ、その感謝のしるしとしてスギを植えた、という伝説が伝わっている(西山八幡神社の杉並木ー米原市西山)。(N)

◆ 2000円・A5判・125頁・サンライズ出版・滋賀・202403刊・ISBN9784883258116

地小出版
方小版

流通センター

ジャンル別
新刊案内

2024年3月1日～31日
流通センター着

※各ジャンル内での出版社名は所在地の北から南の順に並んでいます。

表示されている値段は本体価格となっております。ご購入には別途、消費税がかかります。

【雑誌】

◆ S-style 04 vol. 1. 712 プレスアート編 280mm×210mm 128頁 600円 プレスアート [宮城] 978-4-503-23060-7 24/03

◆ kappo 特別編集 山形 プレスアート編 297mm×230mm 111頁

売行良好書

期間：2024年3月15日～4月14日

※価格は本体価格表示です。別途消費税がかかります。

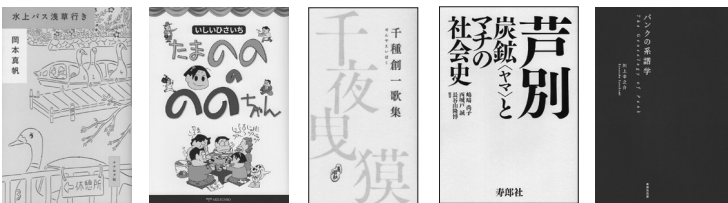
【出荷センター扱い】

- (1)『あかるい花束』1700円・ナナロク社
- (2)『パンクの系譜学』2600円・書肆侃侃房
- (3)『シンソヌジロウの自分探し』1400円・東奥日報社
- (4)『たまのののののちゃん』1100円・蜻文庫
- (5)『チーズではがげんき』1500円・リーブル出版
- (6)『出雲と蘇我王国』2200円・大元出版
- (7)『水上バス浅草行き』1700円・ナナロク社
- (8)『芦別 炭鉱<ヤマ>とマチの社会史』4000円・寿郎社
- (9)『満腹の惑星』2100円・弦書房
- (10)『はじめは小谷城』1500円・サンライズ出版
- (11)『情報の歴史2』6800円・編集工学研究所
- (12)『ためされた地方自治』1800円・桂書房
- (13)『小さきものの近代2』3000円・弦書房
- (14)『軍都 久留米』2500円・花乱社



【ジュンク堂書店池袋店 地方出版社の本—センター扱い図書】

- (1)『水上バス浅草行き』1700円・ナナロク社
- (2)『たまのののののちゃん』1100円・蜻文庫
- (3)『千夜曳摸』1800円・青磁社
- (4)『芦別 炭鉱<ヤマ>とマチの社会史』4000円・寿郎社
- (5)『パンクの系譜学』2600円・書肆侃侃房
- (6)『中国生活図譜』3800円・中国書店(集広舎)
- (7)『誰も知らない日建設計土木』2400円・竹林館
- (8)『シンソヌジロウの自分探し』1400円・東奥日報社
- (9)『NIKKO FISHING method vol. 7』1600円・グラフィックハンズ
- (10)『出雲王国と天皇政権』2250円・大元出版
- (11)『守礼の光』が見た琉球』2400円・ボーダーインク
- (12)『新装版 奥武蔵登山詳細図 全130コース』900円・吉備人出版
- (13)『小さきものの近代1』3000円・弦書房
- (14)『出雲と蘇我王国』2200円・大元出版
- (15)『池田澄子百句』800円・創風社出版
- (16)『サルタ彦大神と竜』2000円・大元出版
- (17)『アニメ地域学』2800円・竹林館
- (18)『希望よあなたに』900円・編集工房ノア



以下ホームページ等でも各種情報提供を行っております。ご利用ください。
 URL : <http://neil.chips.jp/chihosho/> X (旧ツイッター) 公式アカウント : @local_small

トピックス — ★★★

▼今年1月に起きた能登半島地震は、災害復興を50年見てきた室崎神戸大教授によればこれほど「苛酷な災害を見たことがない」とのことです。建物が崩壊し、地域が破壊され、必要な支援が届かず、社会的な孤立が進み、被災者の絶望感は大きいそうです。自然の狂暴化と社会の脆弱化が同時進行する中で、災害が究極まで進化しているといえます(朝日新聞2024年3月16日)。高齢化が進み、生活インフラが脆弱になっている地方の集落(町村合併で行政的には「市」というのが多いのですが)は、日本全国いたるところにあります。そんな日本の中で、いまは無住となった集落を訪ね歩き、そこに希望を見出そうとする書き手があります。無住集落は増加していますが、そこに住まなくなっても守りたいものがある、と訪ねた旧住民の多くは語るそうです。住まなくなっても元の集落に通い、神社・仏閣を整備し続ける人々。秋祭り・春祭りなど、昔から続く祭事をやり続ける人たち。時には声を掛合つて集まり、交流を続けるケースもあるそうです。ふるさとを大切に想う心が残り、その風景、生活の有様を引き継ごうという営みが、各地で続いているということです。震災ではありませんが、生まれ育った土地への愛着の強さを感じます。能登でも集団移住など、昔のコミュニティが残され、引き継がれる施策が強く望まれます。秋田文化出版社から出た、浅原昭生著【**住まなくなっても守りたい 元住民たちの想い**】(本体価格2,000円 ISBN978-4-87022-615-9)は、全国は無住集落を調査し、歴史、往時の暮らし、現況を調べるとともに、住まなくなっても守りたいものは何か?を聞き取った記録です。(川上記)



地方・小出版物のデータになります。綴じて保存してください。

ジュンク堂書店 池袋本店

淳久堂書店

営業時間：午前10時～午後10時

池袋でああなたのふるさとに帰ってみませんか？

2階「ふるさとの棚」では、地方小出版流通センター扱いのご当地本を幅広く取り揃え、皆様のお越しをお待ちしております。

〒171-0022
 東京都豊島区南池袋 2-15-5
 TEL 03-5956-6111
<http://www.junkudo.co.jp>

